令和３年９月１日発行
第５２３号

原町小だより「はらまち」

川口市立原町小学校
全校児童数４２１名

「なかよく」「かしこく」「たくましく」

ＨＰアドレス　https://haramachi-kawaguchi.edumap.jp/

安心できる居場所づくり

加田　明

長い夏休みが終わり、今日から２学期が始まりました。子供たちの笑顔が学校に戻ってきたことは嬉しい限りです。とは言うものの夏休み明け、元気に「おはようございます」と挨拶をして校門をくぐることができた子供たちばかりではありません。長い夏休み明けは「学校に行きたくない」と子供たちの心が揺れ動くことがあります。ましてや、新型コロナウイルスの感染者数が再び増加し、ストレスや不安を抱えた子供たちも多いかと思われます。２学期は期間が長く学習の充実はもとより運動会や音楽会、持久走大会や校外学習など子供たちにとって大きな成長につながる行事も多い学期です。教職員一同、子供たちの心に寄り添い、子供の態度に現れる微妙なサインに注意を払い、不安や悩みの声に耳を傾けるよう努めてまいります。コロナ禍の中でも子供たちの学びを止めないための工夫を模索しながら教育活動を進めていきたいと思います。

さて、ＴＶではオリンピックに替わりパラリンピックの様子が連日放映されています。パラリンピック開会式のタイトルは「ＷＥ　ＨＡＶＥ　ＷＩＮＧＳ（私たちには翼がある）」。車いすの少女が演じる「片翼の小さな飛行機」が注目を集めました。主人公を演じた和合由依さんは１３歳の中学２年生。学校では生徒会の役員を務めたり、吹奏楽に親しんだり。よくしゃべる、よく笑う、友達が多い、コミュニケーション能力がある少女だそうです。先天性の病気で左手や足を自由に使えず、演技経験もなかったそうですが、演出家の方が面接をして「彼女なら大役を務めてくれる」と抜擢をしたそうです。

障害を持つ方たちの活躍はオリンピック同様私たちに感動を与えてくれます。パラリンピックの意義は次のように示されています。

> 様々な障害のあるアスリートたちが創意工夫を凝らして限界に挑むパラリンピックは、多様性を認め、誰もが個性や能力を発揮し活躍できる公正な機会が与えられている場です。それは、共生社会を具現化するための重要なヒントが詰まっている大会であり、社会の中にあるバリアを減らしていくことの必要性や、発想の転換が必要であることにも気づかせてくれます。

では「障害」とは何なのか？

映画「みんなの学校」で知られる大空小学校の初代校長、木村泰子さんは次のように語っています。

> 「障害」と言われているものはなんなのか？それは、その子が生まれ持ったその子の個性、その子らしさ。「その子らしさ」=「個性」じゃないでしょうか。
> その「個性を伸ばす」ことは「障害を長所に変える」ことでもあります。だから、障害のある子がいたら、まず長所に目を向けることから始めます。長所を見つける手がかりは、その子が周りの子供たちとどうかかわって、どんなふうに自分らしく生きているかを見る中で、自然と見えてきます。
> そのためのきっかけは残念ながら大人が与えることはできません。子供同士の関係の中で生まれるものだから。でも、きっかけが生まれる土壌をつくる手立てをする方法はあります。
> それは、その子の周りにいる子供たちを、どれだけ育てるかということ。周りの子供が育てば育つほど、障害のある子が存分に言葉を発し、存分に行動する。そのことが、迷惑だなんて誰も思いません。（中略）
> 障害があろうとなかろうと、外国から来た子供であろうと、金持ちだろうが貧困だろうが、みんな「一人の子供」。その一人一人の子供が、子供同士で学び合う、それが学校ですよね。
> （「『ふつうの子』なんて、どこにもいない」木村泰子

学校は障害の有無や学力や家庭環境などに関係なく、すべての子供にとって安心できる居場所であり、すべての子供の学びを保障してくれる場所、「いつもいっしょがいいね」と思える場所でなくてはなりません。ありのままの自分でいることができ、自分の思いを語れる場所でなければなりません。

ＴＶでパラリンピックを観戦しながら、改めてインクルーシブな社会づくり、学校づくりについて考えてみたいと思います。